

Ⅲ (原文 41 ページ)

Mr. Roland Thomas が「Richard Price, 哲学者そして自由の伝道者」というタイトルの興味深い伝記で主張しているように、「Price は他の誰よりもまさって生命保険 (life insurance) の創設者であった」。生命保険 (life insurance) という言葉は、「死亡保険」(death insurance)あるいは「生命保険」(life assurance)という実際に使われた言葉に置き換えられてしまったが、この主張は議論なしで通用する。というのも、彼は Halley や Simpson や Dodson より後に登場したとはいえ、Dr. Price は彼らよりはるかに先までアクチュアリー理論を進展させただけでなく、彼らのうちで生命保険会社の現実の舵取りを指導した唯一の人間であるからだ。なぜなら Dodson は彼の野望が実現する5年前にもう死亡していたのだから。

コメント (19)

ここでまず Richard Price、次に William Morgan の話が出てきます。Equitable を作った James Dodson は Equitable がスタートする以前に死亡してしまっており、また Equitable のスタートの時からずっと Equitable には Actuary という職位があったのですが、どうもそれは今の我々が理解する Actuary ではなく、どちらかといえば「事務長」あるいは「事務局長」のような職位だったようです。

そこで最初の何人か Actuary の地位に着いた人は今日的な意味では Actuary ではなく、数学もあまり強くなかったようです。

元々は James Dodson がそのあたりは全部やる予定だったのが Equitable が始まる前に死んでしまったので、仕方なくその代りに Mores がやっていたようですが、Mores の立場は Equitable の最高経営責任者ですから、実務的にアクチュアリーが必要な場合、この Price が外部のコンサルタントアクチュアリーとして仕事をしていたようです。

そして Price の甥にあたる William Morgan が Equitable に採用され、最初は Assistant Actuary、その後は正式の Actuary というタイトルでアクチュアリーの仕事をするようになって、Actuary という言葉は今と同じように保険数理に関する仕事をする人という意味になったという話です。

この William Morgan は最初おじさんの Price の指導の下でアクチュアリーの仕事を始め、その後独立してアクチュアリーという仕事の発展に非常に貢献した人ですが、以下に書かれているのはそのような偉大なアクチュアリーも年をとると愚痴っぽくなっていろいろ訳のわからないことを言うようになる、その場合、周りの人はその人があまりにも偉大なのでその人の言うことを疑いもなしに信じてしまって、結果としてとんでもない誤解が蔓延してしまうという実例です。

Mr. Arther Waugh が彼の自伝「One man's road (一人道)」で、彼の曾祖父 William Morgan が Equitable の創業者だと述べているのは正確ではない。

Morgan 自身の言葉による「アシスタント・アクチュアリーという職が用意され、それと同時に Dr. Price の甥であるということで私とその職に任命されたが、その後1年しかその職に留まらないで 1775 年 2 月に、もっと重要であるアクチュアリー職に任じられた。」とする時期に Equitable はすでに創業して 11 年も経っていた。

保険の歴史の中に輝く Morgan の職名(アクチュアリー)というのは、単に一つの会社の創立者だったなどというよりはるかに偉大なものだ。そして Equitable の 175 回目の年次総会で、彼はその時の会長である Mr. H.L.M. Tritton によって「多分今まで生命保険に関わった人の中で最も偉大な人物だ」と正しく表現された。(前記の通り William Morgan が Mr. Waugh の曾祖父だったということは、Mr.

Waugh の才能ある息子達、即ち「The Loom of Youth」を書いた Alec や「Decline and Fall」を書いた Evelyn は William Morgan のやしやご(玄孫)ということになる。)

Morgan は 80 歳になろうとするその晩年に Equitable の幼年期について不満気に、自分は誰よりも Equitable の成長のために尽くしたと書いた。そして以下のような記述が彼の不満だったのだが、それはきちんと精査する必要がある。というのも、これらの記述は保険に関するあまりにも多くの書き手によって何の疑いもなく無条件で引用されているからだ。

1. 『Cornhill の White Lion で開かれた最初の会議(理事会)で、たった4件の契約ができた。そして最初の4ヵ月でも 30 件を超えなかったし、保険金額の総額も 5,100 ポンドを超えなかった。その結果1件あたりの保険金額は 170 ポンドだった。』

(a) すでに見たように、最初の会議(理事会)で成立した契約件数は7件であり、4件ではない。

(b) すでに「生命保険の生まれた場所」で述べたように、最初の6回の毎週の定例理事会で 27 件の契約申込が承認され、25 件の契約となった。もし Morgan の言うことが正しいとすると、最初の4ヵ月のうち残りの期間には(注: 30 件 - 25 件 = 5 件で、4ヵ月 - 6週間 = 11 週間だから、平均して 0.5 件/週の契約となる)2週間に1件未満の契約しかなかったことになる。

現実にはこの期間の件数は Morgan の言っているものより 50%も多い。(この違いは、偉大な数学者はしばしば初歩的な足し算に関しては信用できずいい加減だという、良く知られた事実の良い例だ。)

コメント (20)

ここの所、計算があまり得意でないアクチュアリーとしては嬉しい書きぶりです。とはいえ、私は自分が偉大な数学者だなんて思っているわけではありませんが。

(c) 平均保険金額についてはそれ程過小評価されてはいないが、すでに見たように、これが小さいのはリスクを制限するために最高保険金額を制限していたルールのためだ。

Morgan は最初の6年の終わり頃には平均保険金額は多分 250 ポンド位になっただろうと言っているが、Amicable の場合と比較してみると、Amicable では 1706 年から 1774 年の 68 年間で 4,150 件の死亡に対して 425,061 ポンドが支払われた。平均すると1件あたり 103 ポンド弱ということになる。これは最後の 16-7 年間は1件あたり 125 ポンドを下回らないという保証が付いた上での数字だ。

2. 『このように成長が遅かったので、マネージャー達は急場しのぎのためにもっと急速に成長していることを見せかけるため、25 件目の契約に 275 番という番号を付けることとして、実際より 250 件多いようにみせかけた。』

(a) Mr. Mores の「short account(商品のパンフレット、あるいはご契約のしおりに対応するもの)」(その第5版は 1764 年 8 月 2 日の日付となっている)の中で提案された内規によると、「全ての証券は Trustee によって執行された後、アクチュアリーによって次の毎週の定例理事会で発行され、その概要書と比較され精査される。」となっている。

さて 25 番目の契約は White Lion の居酒屋で開かれた6回の理事会の最後の回で承認された唯一の契約であるが、その契約はこの内規により Equitable の自分のオフィスである Nicholas 通りで発行された最初の証券、ということになる。新しいオフィスで発行する証券

に改めて新しい数から番号を付け直すというのはそれほどおかしな話ではない。多分何年にもわたって厳密に連番で証券に番号をつける保険会社はあまり多くないだろう。そして番号を飛ばしてうまく行っているとみせかけるのは、強力な競争相手が連合していて一般に誤解が撒き散らされて会社の生存がかかっているような時には不自然なことではない。

コメント (21)

この上で、「White Lion の居酒屋で開かれた」という記述があります。これは Equitable が Nicholas 通りのオフィスに到着くまで、暫定的に理事会は White Lion という名前の居酒屋で開かれていたということのようです。

「居酒屋で理事会を開く」というのはちょっと奇異な感もありますが、多分この時代、様々なビジネスが生まれつつある時代で、居酒屋やコーヒーハウスはビジネスの打合せや契約をする場所であったようです。

コーヒーハウスに集まって海上保険の引受の相談をしていたブローカー達が集まってロイズを作ったのが 1760 年。Equitable がスタートする 2 年前です。

時代は会社組織よりむしろ個人事業主が主に活躍していた時代で、店舗を構えて商品を揃えておいたり、店舗にお客さんが来るのを待っているような仕事でなければ、コーヒーハウスや居酒屋をオフィスにするというのも、何かと便利なのかも知れません。

- (b) Mr. Mores は大して気にもしないで「最初の契約である自分の証券に 1 番という番号をつけたいと思わなかったとしたら、最初の証券には 250 番という番号が付いただろう。」と言っている。

コメント (22)

保険証券に証券番号をつける場合、どのような番号を付けるかというのはなかなか面白い問題です。単純に 1 番から順にというのも良いのですが、それだと桁数に大小が出てしまいます。そこで宝くじ方式で、たとえば 100001 番から順番に・・・なんて具合にすることもあります。あるいは何桁もある番号をブロックに分けて、最初の 4 桁は発行した年月・次の 2 桁は保険種類・残りの桁を連番で・・・などということもあります。

コンピュータによる事務処理が普通になってくると「証券番号の打ち間違い」という問題が発生してくるので、それを防ぐため最後の 1 桁をチェックディジットとして使い、良くある間違いをした場合に即座に「打ち間違いエラー」だと再入力させるような仕組みもあります。

番号も数字だけでなくアルファベットを使ったり、日本だったらカナを使ったり、あるいは途中で()を使ったりします。

そんなわけでこの「証券番号の水増し」という議論を読むと、古きよき時代だなあという気がします。

- (c) このような言い逃れとは別に、初めの頃は番号はできるだけ少なくしようとしていたようだ。追加の契約は元の契約と一緒にされたが、証券を発行するのは遅れることがあり、時には別々の契約に同じ番号がついたりもした。

説明しておかなければいけないが、1769 年 5 月までは契約の番号は議事録の余白の部分に記されていた。現在残っている被保険者のアルファベット(順の一覧表)の最も早いものは 1774 年のすなわち Morgan が Assistant Actuary になった時の日付のものだった。そしてそれが作成された時までには消滅してしまっていた契約の番号は、次の資料から特定された。

- (i) 死亡保険金の請求あるいは解約の請求に対して支払が承認されたもの
- (ii) 1763 年 10 月 3 日より始まる、2 回目以降の保険料の領収書の写しの帳簿
- (iii) 補間

契約番号の連続性から我々は何人かの人について、その人を被保険者とする別々の契約に同じ番号が付けられたと結論するだけでなく、2回目以後保険料の帳簿の中に実際そのような例を見つけることができる。1763年12月1日に、1762年11月に発行された契約の2回目の保険料が猶予期間内に入金されたが、それについて同じ「4」という番号が付けられた。それは1762年9月16日に発行された契約と同じ理事に対する4件目の契約だったからであって、その(1762年9月16日の契約の)2回目の保険料は1763年10月13日に猶予期間内に払込まれている。

コメント (23)

前に書いた保険金額の制限のため、当初何百ポンドあるいは1,000ポンドの契約に加入しようとしていた人も、初めは100ポンドの契約に入り、制限が緩和される都度保険金額を追加していったようです。このような場合、別々の証券番号にするのか、一緒にして同じ証券番号にするのかというのは、今でも問題になりますね。

今では別々の新規契約にするという取扱いと、前の契約に対する保険金額の増額という取扱いと明確に区分していますからあまり混乱は起こらないのですが、生命保険の初めの頃はいろいろ試行錯誤があったんだろうと思います。

- (d) Mr. Morgan はもっと長生きして後年の、たとえばビクトリア朝時代の(ただし大英帝国では起こらなかったと思っているが)リバージョナリーボーナスによる増分を新契約とカウントしたり、20世紀になってからの家族収入保険の保険金額を実際の危険保険金額ではなく別々のタイミングで支払われる分割払いの金額の合計額としたり、(特定の会社だけで行なわれた)据置年金の一括払のオプションを生命保険とみなしたりするような、新契約成績を膨らませるやり方を知ったら、もっとショックを受けたらう。

コメント (24)

これを見ると、イギリスその他の国でも新契約成績を件数でみたり保険金額で見たりして、その成績を他社より良く見せようとして、いろいろ工夫がされているようです。朝日生命の「保険王」という商品はアカウント型の保険なんですけど、他の会社のアカウント型の商品はアカウントの部分とその上の定期特約その他の特約全部合わせて1件とカウントするところ、朝日生命ではこれを全部バラバラに数えて、ある時突然新契約件数が前の年の何倍かになったということがありました。いろいろ工夫するものですね。

ビクトリア朝というのは、普通は「あの古き良きビクトリア朝」という具合に使われるんですが、ここでは「もっと長生きしてビクトリア朝の頃まで生きていたとしたら」という具合に使われているのも面白いですね。

3. 『会社を「重要だ」と見せるという同じ目的で使われたもう一つのみっともない急場しのぎは、(Equitableの業務に)何の興味も関心もなかった Lord Willoughby de Parham (Willoughby 卿)その他の有名人の(もちろんその人の了解を取ってのことだが)名前を使ったことだ。2年経ってもうこんなまやかしが必要がなくなった時、Lord Willoughby に対して名前を使わせてくれたことに対する感謝の決議がなされた。』

- (a) 感謝の決議は1764年5月3日の総会の直後になされた。その総会ではそれまで会議に一度も出席しなかった(Willoughby 卿を含む)4人の理事が再任されなかった。これは会社が設立されて20ヵ月以内のことなので、Mr. Morgan が「最初の3年間に総会は開かれなかったようだ」と言っているのは正しくない。

【この他にも1762年10月21日の、入会金の額を保険金100ポンドあたり5シリング(0.25%)に引下げた(決議をした)総会も記録が残っている。Mr. Morganの言っているのは

初期の総会の完全な議事録は保存されていない、ということではない。】

Mr. Mores は「私は Willoughby 卿が会議に出席することを防ぐために理事達によって採用された」と告白している。理事達は彼 (Willoughby 卿) のように過度に用心深い人は契約番号のいじくりを黙認しないだろうことを恐れたのかも知れない。

- (b) William Morgan は彼の時代のあらゆる優れた詩や散文は、別にお追従ということではなく、誰か貴族に属するパトロンに捧げられたものだということを認めるべきだ。これはローマ時代以来の伝統であり、また学校で暗記したホラチウスから Maecenas に捧げられた頌歌を思い出すべきだ。

Maecenas atavis edite regibus,

O et proesidium et dulce decus meum

コメント (25)

これはホラティウスの「歌集」という詩集の最初の「マエケナスに捧げる」という詩の初めの部分です。

鈴木一郎訳「ホラティウス全集」ではこの部分を

王家の出なるマエケーナス

わが護り主、わが誇り

としています。

藤井昇訳「歌章」では

マエケーナスさま、いく代も前より王族たりし家系(いえ)に出でられ、

しかもおお、わたしの庇護者(まもりて)、わたしの楽しき栄誉(ほまれ)なるかたよ、

と訳しています。

この歌集あるいは歌章という詩集には、

マエケーナスに捧げる

アウグストゥス帝に捧げる

ギリシャに赴くヴェルギリウスに捧げる

とか

アグリッパ賛歌

アウグストゥス賛歌

ヴィーナス賛歌

などという詩が入っています。

ホラティウスというのはユリウス・カエサルが「ブルータス、お前もか」で殺されたあとの、初代ローマ皇帝アウグスティヌスの時代の詩人です。

そしてこのマエケーナスというのはその時代の有力者の一人で、アウグスティヌス帝の代理みたいな仕事もしたんですが、公職にはつかず、また大金持で文人仲間の面倒を良くみた人ということです。

ここで言っているパトロンの代表者みたいな人です。

企業が文化活動を支援することを「メセナ」と言いますが、このメセナというのは、マエケーナスの名前に由来しているということですから、こんな引用も気をつけないといけませんね。

カタカナで見ると、メセナとマエケーナスとはまるで違いますが、つづりを見ると、Maecenas と mécénat ですから、納得できますね。

20 世紀の今日でも多くの保険会社が有名な人の名前を名誉理事とか名誉仲裁人として公表している。

コメント (26)

会社を格好良く見せるため有名人を役員にしたりするというのは、21 世紀の今日でも良くある話ですよ。William Morgan はそんな見せかけが許せなかったんでしょうか。アクチュアリーというのは生真面目な人が多いことは多いのですが。でも Morgan も有名人ですから、多分いろんな組織の名誉職についていたんじゃないかなと思います。